

第34期第2回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



令和元年12月17日（火）京都市総合教育センターで、第34期京都市社会教育委員会議の第2回会議が開催されました。「まちづくりへの学生の参画」についての議論がされました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち12名） ※五十音順

石川 一郎 委員，大澤 彰久 委員，狩野 茂 委員，櫻井 寿美 委員，
鈴鹿可奈子 委員，園部 晋吾 委員，田村 穂絵 委員，豊田まゆみ 委員，
廣岡 和晃 委員，柁木 良子 委員，森 清顕 委員，吉川左紀子 委員

第34期第2回社会教育委員会議次第

- 1 第34期委員自己紹介
- 2 議 事 まちづくりへの学生の参画について
- 3 報 告
 - (1) 第61回全国社会教育研究大会兵庫大会について
 - (2) 京（みやこ）まナビィニュースレターについて
 - (3) 京（みやこ）まナビィミーティングについて
 - (4) 京都市生涯学習市民フォーラムについて
- 4 主催事業及び刊行物の案内

■ 34期委員自己紹介

- 狩野 茂 委員（京都市小学校長会理事・京都市立七条小学校長）

七条小学校で校長をしています狩野と申します。教員としては、理科研究会の会長もしております。先日、岐阜で理科教育の全国の研究発表がありました。研究授業を拝見しましたが、京都は全国と比べ、そんな色のない理科教育を日常的に実践できていると思っております。よろしくお願いたします。



- 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院八ツ橋総本店専務取締役）



前期から引き続き務めさせていただきます。この社会教育委員会議は子どもの観点から論じることが多いですが、昨年、娘が生まれましたので、これまでと違った視点で見えることがあるのかと思っています。まちを歩いていても、これまでと違った視点でものごとが見えるようになってきています。そのため、これまでと申し上げる意見が違ってくるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

- 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人）

33期から引き続きお世話になります。日本料理アカデミーという日本国内はもとより世界に日本料理を普及していこうという団体に所属しています。地域食育委員会の委員長をしており、教育委員会とも協力しながら小学校で「出汁」の授業をさせていただいたりしています。「教育」に関わらせていただいて、私自身も学ぶことが非常に多い中、感じたことをここで述べさせていただけたらと思っています。



■ 議事 まちづくりへの学生の参画について

- 配布資料 [「大学のまち京都・学生のまち京都」の推進](#)
報告者（京都市総合企画局 総合政策室 塩野谷 和寛 大学政策部長）
- 配布資料 [「大学との連携について」](#)
報告者（京都市総合教育センター 教員養成支援室 前田 智弘 室長）



○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）



「大学のまち京都・学生のまち京都」ということで、京都市の人口147万人のうち約10%が学生さんであり、その15万人の中で学生ボランティアに登録されているのは1,800人ぐらいとのことでした。パーセンテージから見るとまだまだ可能性があるかなと思いながら聞いていましたが、非常にたくさんの取組があるとも感じました。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

学生さんの力、若い人のアイデアというものはまちを活気づけるとおもいます。私は北山街協同組合の専務理事を長年やっておりまして、北山を活性化するために北山街だけではなくて、植物園、コンサートホール、歴彩館、府立大学とこの5つで「北山文化環境ゾーン交流連携会議（北山ぱーとなーず）」というのを作って定期的に意見交換をしていました。北山街で何かイベントをするときは、府立大学の学生さんや先生も来られるので、「こういうことを北山でやるので学生さんも一緒に加わってブースを作ったり、何かやりたいことがあれば貸しますよ。」と他の学生さんに情報を伝えていただいていた。全体的にまちを盛り上げるために1つの組合だけではなくて、施設なりそれぞれの代表者で集まって定期的にコミュニケーションを取るということをしています。もう少し範囲を広げれば北山通の延長でノートルダム女子大や、もう少し行くと工芸繊維大学がありますので、アートのことをする時は工織の学生さんたちのデザインを取り入れるとか幅が広がります。「何かまちのことをしたい。」「ボランティア活動をしたい。」と思っている学生さんも多いと思うのですが、接点をどうやって持つかが難しい。住んではいるけども、学生が隣のおじさんと喋るとかは、なかなかなかったりします。学生だけでなく、大学の先生方とか事務の方も常にまちの人と交流を持つ機会が必要なのかと思えます。



それから、たまたま「日本の伝統と文化」という着物の授業をしていますので、私のクラスにはそういうことに興味がある人が多いですね。授業で必ず京都の三大祭の話をします。前期は葵祭の5月15日までに、後期は時代祭の10月22日までには「見に行ける人は授業がなかったら見に行ってください。」と話をします。葵祭の時に白装束の白丁、調度品を持つボランティアを「先生やってくる！」と言って私のクラスの男子学生が2人ぐらい関わったりもしています。なかなか学生も忙しいのですが、やはり興味があって、何かやりたいなというふうに、非常に前向きな学生さんも多いと思いますから、いろんな情報を少しでも流してあげられればキャッチしてくれますし、情報を提供していくことが大事かなと思います。

アプリを開発中とのことでしたが、この時代は便利なので私のクラスでも、「着物に興味ありますか?」とか「着物を着たいと思いますか?」と、着物のアンケートを全国に取る

ことなった場合、アプリを使うと3日で200人ぐらいのレスポンスがあったりします。一気に広がるのはいい意味でも悪い意味でも使いようだと思いますので、「こういうことがあるけど、誰かいる？」と聞くと、うまく使えば、そこにアンテナを張っている学生がすぐ集まってくるのが今の時代の良さだと思います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

ありがとうございます。こういう取組をするときの情報発信の仕方ですね。口コミで広がっていくこともありますが、最近は本当にアプリ一つ、使い方によって非常に有効ではないかと思います。

○ 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市PTA連絡協議会会長）

「京都教師塾市立学校実地研修実施状況」で、10期から14期にかけて10期が297名、14期が179名と非常に学生さんの中で教師希望の方が減ってきているということがわかりました。

これは、最近ちまたでよく耳にする、教育現場がブラック職場ではないか、ということが一因になっているのではないかと思います。

今、私はPTAもさせていただいていますので、学校の先生方を日頃見ていると、やはり実際に遅くまで残っておられる光景を目にします。先生方には子どもに向き合う時間をたくさんってほしいと考えています。今は校務支援員さんもおられますし、そういった方に御協力いただいて、先生の子どもに向き合う時間を最大限確保して、「良い職場ですよ。」というのを学生さんに知っていただきたいと思います。また、PTAも先生方のそういった時間を取れるように積極的に協力していきたいと考えていて、今、働き方改革ということで教育委員会さんと一緒にPTAも取り組んでいるところです。

「京都教師塾市立学校実地研修」の登録人数が減ったことについては、学生さんが教育現場をどう捉えているのかを調査できないでしょうか。われわれは保護者として学校に行くことが多いので、学校の先生は大変だから少ないのかなと、なんとなく長時間拘束されて学生さんは先生になりたくないのかなという思いはありますが、学生さんに実際聞いていないので、学生さんは本当にどういう思いでいらっしゃるのかを聞いていただいて、それを解決しながら来期以降、教員を志望する方がV字回復していけば良いかと思います。学生さんの思いというのを受け止めて我々保護者と教育委員会さんと共に良い教育現場となるようにやっていきたいなと考えております。

○ 田村 穂絵 委員（市民公募委員）



学生の教職志望者数の減少というのは最近ニュースでもよく取り上げられている「ブラック」というのが大きいのと、就活自体が企業に就職する方が確実だということもあるのですが、意外と私の周りの教職志望者の子で多いのが、自分が生徒だった時の学校の見方と大学生になってからボランティアや実地研修で入る学校が全然違う。全然ギャップについていけないというのが割と多いのかなと思います。

例えば学生ボランティアで入ったとしても、自分が何をしたらいいかわからない、自分の役割がわからないし、居場所がない。先生方はそれぞれ自分のことで忙しくしている。私は同じ中学校に3年間ボランティアとして行っているのですが、仲良くなった先生の話聞いてみると、やはり初めて来られた学生ボランティアの人にどういう仕事の分担をしたらいいかわからないそうです。週に1時間、週に半日だったりするとどこまで責任を任せていいかわからないというのが学校の先生の本音だったりします。学生側も自分が生徒のまま意識が低い状態で学校に入って何も知らないまま甘えた状態で、学校と馴染まないまま大学に帰ってくるケースもあると思います。先生と学生ボランティアの連携、つながりを円滑にできればいいのかなと思います。

また、熱心であればあるほど自分の出身の自治体と京都の学校の雰囲気の違いを感じて、京都で先生になるのは難しいかもしれないという意見も多かったです。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

ありがとうございました。学校に入ってからその学生さんと学校の担当教員の方との上手な連携、こういったことを学生ボランティアさんをお願いすればいいのか、きめの細かいやりとりというのが必要という気がしました。

○ 櫻井 寿美 委員（市民公募委員）

皆様の意見を聞かせていただいて、最初にプレゼンでいろんな施策があることを伺い、次に、現場の状況をお伺いすると、せっかくある施策がうまく機能していなかったり、噛み合っていなかったりとそういう部分で非常にもったいないなと思います。

やはり、今おっしゃっていただいたとおり、本音でやりとりをできる雰囲気とか環境が必要かなと思います。建前だけではなくて、本音で良いものを作ろうというものが欲しいなと感じました。



○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハツ橋総本店専務取締役）

インターンシップとかボランティアの件についてですが、本当におっしゃるように大学生と実際の職場では、教職に限らずギャップがあると思います。当社でもインターンを受け付けているのですが、どの職場でも大学生が考えている働く環境と実際の働く環境が違う、どんどんギャップが出てきているのかなと思う時があります。インターンシップをして就職をされた方や、うちの場合はアルバイトから入られる方は続くんですが、ポンと入られた方で高校生の方は割と順応されるのですが、大学生の方は結構思っていたのと違うという理由だけで研修期間に辞める方が増えています。昔はあまりなかったのですが、やはりこれは学校というよりもどちらかというと家庭のこともあると思います。両親が「いいよ、いいよ。別にいいよ。」という方が多くて、入って1ヶ月で思ったのとちょっと違うので辞めますという方が大学生ではいらっしゃいます。



こういう状態になっているからこそ余計に教職という実際の経験が必要な職場で、そういうことが起こってしまうと、学生さんにとってもまた就職活動をし直さないといけなくなり、どんどん不利なことになってしまいますし、現場でも人手不足になると思います。ボランティアがどんどん進んで、こういう仕事なんだと経験してもらって、それで合わないようなら、そこで諦められても私は仕方ないと思います。それでも田村さんのようにどんどんやろうという方であればボランティアを続けられればいいなと思います。教職もそうですし、それ以外の場面でも、実際に就職するという大きな決断に至る前の段階で、実際に現場に入って経験するということが、時代的に今後、必要になってくるのかなと思います。

ただ、先程の柁木委員の意見でもありました学生さんへの情報提供という点では非常に恵まれていると思います。私も役をしていますので地域のお祭りに出ると、大学生のボランティアの方が多くて、力を使う仕事を男の子がしていたり、あと、難しい役でも大学生の方が一緒になってやっていたりという風景を見るので、これは非常に素晴らしいなと思うことが多いです。

その一方、自分が学生の時、どうだったかなあと思うと、自分自身が京都で育ったということもあると思いますが、京都にずっといるからこそ、京都ならではの体験のありがたさは、その時はわからないのかなと思います。私自身、学生時はそれが京都だからできるというありがたさはわからずに当たり前のことだと思っていましたし、そこまで考えずに卒業した時に、こんなこともしておいたらよかった、学生の時、時間があるときにしておけばよかったな、ということもありました。京都の高校生のうちで京都の大学に進む生徒が半分になる理由はそこかなとも思います。

私はその後も京都にいますのでそれが体験できたりしますが、もしかすると大学で他府県に出てから、「京都にいれば、あんなことができたんだ。」と気づく方もいらっしゃるんで、それが事前にわかれば一番いいなと考えています。私の場合も、海外留学がきっかけだったので外に出ないとわからないということはあるとは思いますが、今、京都にいる学生の方にはできるだけ地域の人との会話の中で気付いていってほしいと思います。

先程のお祭りの話に戻りますが、その祭りに参加する方に接していると大きく2パターンに分かれているように感じます。積極的にどんどん参加したい、どんどん京都の文化を知りたいから終わった後も地元の人と喋る方もいれば、こちらから話しかけても全然閉ざしちゃう方というのもいらっしゃるんです。どういう気持ちでボランティアをされたかわからないんですが、受け入れる側とのギャップを感じる場合があります。ちょうどそれを見ていて思ったのが、京都学生祭典に参加される学生さんと協賛する企業側にもそういうギャップがあるのではないかと企業側が感じていることです。少し残念なことです。京都学生祭典に最初のほうに関わった企業が、協賛から引いた時がありました。温度差が大きすぎると京都学生祭典をされている学生さんは学生だけで盛り上がり地域清掃とかになってくると私たちとか年配の方が清掃していて、みんなお祭り気分で遊んでいるだけではないか、というのがちょっと問題になったことがありました。

そういうことがあると学生と地域の方とのギャップが生まれてしまって、学生さんのすることに対して「学生だからマナーを守らない。」とかどんどんギャップが出てしまってもったいないです。京都学生祭典とは限らないのですが、どうしても学生さんなので若い部分があって、地元のカフェとかに行くと結構、そういう活動をしている学生さんがしゃ

べられてることが多く、「いいんだよー、学生がやってる、って言ったら企業はお金を出してくれるから。」と話しているのを聞いたりすることがあります。せっかくされるのにそういうのを聞いてしまったりすると学生との隔たりができてしまうので、やはり特に市が関わる行事だと、しっかり「仕事なんだよ」という点も指導してあげてもらえたらと思います。また、お祭りに出られるんだったら、榎木先生の所の学生さんなんかだったら、先生に「行ってきます。」と言って行かれるので、しっかり交流されると思うのですが、「地元の方の話を聞いてきてね。」と一言言うだけでちょっと意識は変わるのではないかなと感じます。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）



教員を指導する人が減ってきているという記事を読んだ時にまわりの人の声として「先生の質がね。どうかな。」とすごく不安がる声もありました。やはりしんどい職場だと思います。私も30年務めてわかるのですが、やはり現場をよく知っている人が現場に出てもらうのは子どもたちにとってもすごくプラスになるもので、このボランティア活動を経験してほしいなと思います。ただ、実際、何をしたらよいかわからない学生さんに対して、私がもし現場にいる教員の立場であったら、やはり1つ1つ指示するのはとてもしんどいし、そんな余裕はないです。ですから、ボランティアの方が自ら気付いて動いていただくのが理想です。私も退職してから学校のお手伝いに行った時に「すごく助かります。」と言っていたのですが、わかっている者が行くと担任の先生もすごく助かります。とは、申しましてボランティアの方が自ら動くのは難しいので、ある程度、お任せする内容を限定することも必要かと思います。私が一番やって欲しいのは放課後に子どもたちと接することです。先生はすぐ会議に入ってしまうので。放課後に残って遊ぶ子どもも実は少ないですが、子どもたちが忙しくなっているからこそ、自由時間、休み時間、中間休みに接してくれる若い人がいれば子どもたちもいきいきとできるのではないかとすごく思いました。

私は西京の地域にいますが、旧街道筋で明智光秀が本能寺に行く時にもしかしたら通ったんじゃないかという街道筋に住んでいます。その街道に軒先市という市を今年で3年目なんですけれども開いています。今年の6月にやった時に近くに京大工学部があって、京大の学生とか嵯峨美術大学の学生がお店を出してくれていて、大学生が参加してくれているのが目につきました。地域の出身でやっている人がたぶん声をかけたんだと思いますが、自治会も女性会も高齢化してきているのでやはり若い力が必要ですので、上手に連携してやっていきたいのですが、息子さんの友達とかそういう繋がりでしか、なかなか広がりません。どのようにして声かけをしたら良いのか、わからない部分もありますが、そういうふうに高齢化している各種団体にもこういう若い力が欲しいと考えています。

これも西京区のある地域なのですが、認知症カフェをしていて、行ってみたら若い人たちが結構、そのカフェに参加してくれていました。ボランティアの学生の人がいると、やはり雰囲気は全然違います。認知症の方の刺激にもなるだろうし、「こういうふうなのを私たちの学区でもやりたいね。」という声はあるのですが、なかなかどうやってやるのかは模索中です。

○ 狩野 茂 委員（京都市小学校長会理事・京都市立七条小学校長）

社会がだいぶ変わってきて、子どもを親が守りすぎている感じが僕の中では非常にしています。具体的に言うと、大学の卒業式に親と一緒にいくと、自分の頃はそれがすごく恥ずかしかった時代で、親が大学の卒業式にやって来る、入学式に来ることですら嫌でした。今は、それが平然と子どもの中で喜んでやっている姿を見ていると、かなり親御さんが子どもさんたちを困っているような感じがします。子どもたちが社会に出た時に本当に社会人として一人前の人間で出ているのか、と言ったらまだまだ親御さんの庇護のもとに生きている。だから昔だったら自分が志で決めた仕事は、多少辛いことがあっても耐えました。ところが今は、志・理想と少し違うとなると「辞めたいです。」となり、親は「それだったら辞めたらいい。」となります。



昔の親は「お前が決めたことだろう。」もっと言うとさらに前の世代は「一度決めたことをそんな簡単に辞めるな。」というような風潮があったと思うのですが、今は「辞めなければ辞めたらいい。」が普通になってきているのかなという気がします。これは社会が豊かになってきたので、いろんな道、やり方があるので自分にあったやり方をやればいいという風潮があり、それはそれで悪いことではないと思います。同じように学校の先生も志を持ってなりますし、難しい試験を通過して採用されます。ところが自分の理想、考え方と学校のシステムは違う。当然違って当たり前だとは思いますが。ドラマなどで子どもと遊んで一日が終わるといふ印象が多く、最初入った人たちにはあるかもしれない。でも本来、教育というのは教材研究をし、授業を子どもたちにとってわかりやすいものに仕上げていくには、それなりの準備が必要です。その準備を置いておいて、子どもと接する時間、要するに放課後、子どもと遊ぶだけでいいというのは、僕は違うのではないかと思います。当然、子どもと接する時間は必要かもしれませんが。それが例えば放課後、16時半まで遊ぶのであれば我々の職業としての勤務時間は17:10か17:30までなので、1時間で準備ができるかという、親の立場からしたら「そんな準備で授業をしてくれるな！」というふうに思われる。でも、現実の問題は限られた時間の中でそれをしないとイケない、そうしたら新しく来られた先生方はこんな短い時間で準備はできない、もっと必要だとなります。そうすると長時間労働、ブラックだとなってしまいます。

これは私個人の意見ですが、自分が若い時はそのブラックをブラックと考えるのではなく、子どもたちに必要な時間として捉えていたので10時間超えようが12時間超えようが、趣味と実益が含まれていたもので、それほどしんどいというイメージでは無かったです。ただ、労働という観点では、それはものすごくブラックです。何を取るかです。聖職という言葉で言うならば、昔の「聖職の碑」という映画では死んでもいいというような描写がありましたけれども、そこまでとは言いませんがやはり聖職である以上、ある一定のハードなものがそこには存在しているであろうと思うのです。ところが、働き方改革が出てきて、そうすると「8時間以上の労働はダメです。」となる。我々にとったらすごく過激な労働条件ですので、それもわかります。最近は子どもに何かあると、何でもかんでも学校に言われます。教育に携わる者としては、全て子どものためにやらないといけなく、でも労働者としての観点からすると、そういうことはなかなか難しい。昔であれば、保護者の方は子どもたちが困ったら、「お前が悪いんだ」と「お前が1人でなんとかせよ」と言い

ました。でも最近はお婆親が出て来られて、「うちの子どもが困っている、なんとか学校はせよ。」となる。場合によっては、お婆あさんまで出て来られます。それはそれで、子どもたちを守るのには親や、保護者の立場なら当然だと思います。だからこそ、ものすごく難しいような気がします。そういった教育現場にボーンと入った学生さんはたぶんドギマギすると思います。ドギマギした時に「これはちょっと、イメージと違う。」となるのかと。例えば自分が若い時に、今のようにいろんな制度があってボランティアで入ったとしたら、担任の先生に「こんなことしてもいいですか？」とか聞いていたと思います。ところが今は聞かないんですね、待っているんです。ずっと、そうすると担任の側にすると、待たされるよりは、自分が動いたほうが早い。

何が言いたいかというと、もっと志を持っているのであれば、自ら積極的に動くということが必要かと思えます。周りにお膳立てをしてもらわないと動けないというそういう体質が生まれてきているのは、たぶん教育現場だけではなくて、他の企業に行った時もお膳立てがなければ若い人が動けない。やっとお膳立てが必要なくなるまで、スキルをつけてやるのに1年2年はかかる、だから企業では研修が結構長い間ある。学校でも研修はしますけれどもやっぱり人と人との付き合いなのでもっといろんな研修が必要なのではないかと思えます。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

今の大学生を見ていると新しい環境の中でパッと自分を出して問いかけながら、自分の行動を調整していく力は、昔よりは落ちているのかもしれませんが。ただ、それがずっとそのままであり続けるかということ決してそんなことはなくて、何か本当にちょっとしたきっかけで大きく変わるような気がします。

私は小学校、中学校の中に大学生が入るということは先生にとっても子どもにとっても非常に刺激になりますし、必ず良い繋がりができる在り方というのは考えられるような気がします。やっぱりそういう学校に行ったことで先生になりたいと思う人たちも必ずいますし、そういう環境をどう用意できるかということですね。

先生全員がいっぱいいっぱいの状況ではなかなかそれは難しいとは思いますが、そこに豊田委員のような経験のある方たちがアドバイスするとか何かそういうことができると、すごく大きく感じます。

○ 森 清頭 委員（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

3点ほどございます。まず、先ほどの報告等を伺いながら、学生さんと行政とのマッチングとか関わりということではいろいろな施策があるんだなと思えました。逆に出口側の市民との接点の部分で市民がこういうことをやっているというのを全然知らないということがあり、せっかくこうした施策があるなら、もう少しこうしたいという方々がいっぱい出て来ると思えます。

例えば、今、うちの寺にも出入りしている文化財の人たちなんか、もっと若い人に「こういう現場を知って欲しい。」「どうやったら知ってもらえるか。」と、接点を求めている人たちもたくさんいまして、こういうのがあるのでしたら、「現場にも見に来てほしいな。」という要望が出て来るのではないかと思います。アプリも開発中と



ということで今後、どのような仕組みになっていくのかわかりませんが、学生と市民の接点の一つの窓口になれば、私どもも勉強したいなと思っております。

「京都世界遺産PBL科目」と「京都学生祭典」には、うちも少し関わらせていただいているところから、少し感想のようなことにはなるのですが御容赦ください。京都学生祭典には、6回目ぐらいから関わらせていただいています。今、議論のなかにもありましたボランティアの方が来られても、そのボランティアの方にいろいろお膳立てをしないといけない、というような現場がこういうところにもあります。京都学生祭典の実行委員さんが挨拶に来るのですが、依頼状の内容とか部屋に入ってきた時にどこに座るのかについて、細かいことですが指摘します。「ここはこうしたほうがいいよ。」とか「他の会社、企業に『寄付金をお願いします。』と言っても、これでは誰も受けてくれへんで。なんでこれがしたいのかが全くわからへん。ごめん、書き直して来て。」とあえて言います。今は「〇〇ハラ」というのがありますので、こちらもドキドキしながらですけども。こちらも信念として「これは今のうち、失敗してもいい間だから知っておいて欲しい。」という思いからお伝えしています。

少しずれるかもしれませんが、京都学生祭典をずっと見てきた中で、一番の弱点は「継続性がない」というところだと思います。年ごとで執行部が変わっていきませんが、去年の執行部がやった内容を次の執行部が引き継いでいません。歴代の実行委員長に「何故、次の実行委員会をすぐに立ち上げて、一緒に動かない？」と毎回言っています。一緒に動いたら企業に献金をお願いする時でも顔を覚えてもらえます。同じことを必ず続けてやれとは言わないけれども、これまでどのようにやってきたかがわかっていると良い点、悪い点が見えてきて、そうすると継続性ができます。「ゼロからのスタートを毎回やっているのは時間の無駄」ということを10年ほど、ずっと伝えていきます。今年も言っていたのですが、変わらないという現実があります。

「京都世界遺産PBL科目」は今、うちでは2科目、清水寺の中で一つ問題を見つけてというような通年の授業と夏期集中型の文化財防災学の2件を受けています。この「京都世界遺産PBL科目」は、「明日の京都 文化遺産プラットフォーム」がマッチングして、やっております。清水寺の他に、仁和寺さん、醍醐寺さん、比叡山延暦寺さん、二条城さん、上賀茂神社さん、下鴨神社さんですとずっとやられています。他のところはよくわかりませんが、うちの場合で言いますと結構、手間がかかります。大学から先生が来られて授業をされるだけであれば、ただの場所貸しになってしまい、うちでやる意味がなくなってしまいます。我々自身がうちでやる意味はなんなのだという観点から関与をしないといけません。そういう意味では、こちらも授業のフレームはあるのですが、学生さんに投げかけを絶えずしていることをございます。なので年に数人、脱落者が出て来るといえば出て来るとは、これはまあ仕方がないかなと。そこはしっかりしておかないと授業が成り立たないようになってしまうのはいかんと思っております。

○ 園部 晋吾 委員 (NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長, 山ばな平八茶屋若主人)



大学生と社会, そこには大きな隔りがあるというのは皆様の意見を聞いていてもよくわかるのですが, ただ隔りがあるからそれを無視していたら次の世代がいなくなるのかなという気がします。次の世代すなわち後継していく人たちがいなくなると感じています。今, 確かに私自身も大学生に感じることは, まず意見にも拳がっていましたけれど, 過保護の中で育っていることをすごく感じます。そして, 人との関わりというのがものすごく苦手なのかなと。あくまでも自分を中心とした世界観の中で生きておられるのかなと。全部が全部そうではないですが, なんとなくそ

ういう形。それはなぜかと言うと, 家庭自体が核家族になり, 両親が共働きになった中で, 自分1人である, 子どもたちだけでいる中で育っていくと, 大人との関わり方をどうしていったらいいかが, 本当にわかりづらくなるだろうと思います。また, やることに対して権利ばかり主張して無責任なことが多い。なんでもかんでも権利を主張するのは今の社会の風潮ですね。私たちも働き方改革にしても何にしても, 実際に企業としてやっていくにはすごく困ることが多々あるのですが, 弱者保護の政策がどんどん出てきている中で, 権利ばかり主張していくと, やっぱり無責任になっていくのかなという気がします。権利を主張するには必ず義務というのものがあるわけです。きちんと義務を遂行したうえで, 権利を主張するということを, 私たちは学生さんに, 求めていきたいなと思います。一方で, それが社会の流れであれば, そういう人たちを使っていけないといけない, という我々の意識改革も必要かなとも考えています。

実際にどういうものかと言いますと, 例えば, 学生さんがボランティアで来られるということがあります。学生ボランティアとして来られた時にその学生さんに伝えていけないといけない, 教えていけないといけない, それは面倒くさいかもしれませんし, 大変かもしれませんが, そこはその人たちを即戦力として見るのではなくて, 少なくとも自分が少しでも伝えていって, こんな仕事であるということを伝えていって, 「こういうことをやっていってくれるか。」と, できることを任せていき, それを責任持ってしていってもらおうという形。やはり, 先に経験している人たちは, 「教える」「伝える」ということもしっかりしていけないといけないのかなと思います。伝わらなかったら, どういう伝え方をしたら伝わるのかな。どういうことを考えたらやっていってもらえるのかな, ということを踏まえてやらないといけないのかと思います。

ボランティアの募集をかけるにしても, 募集の文面一つで全く違ってきます。学生に渡す文面を企業がちゃんと確認しているのか。例えば, 我々もアルバイトの募集をします。今は軽易な文章で募集するように勧められます。最初に難しいことを書いてしまうと, そこでハードルが上がってしまって, 学生さんが来ないと言われてしまう。私も最初, その提案を受け入れたかたちで募集をかけたんですね。そうすると, 申し訳ないですが, そういう学生さんが集まってくるんです。そこで, 次の募集では柔らかい文章ではなく, 厳しい内容をきちんと書いたんです。そうすると, そういう学生さんが集まってきました。

そこで、結局、企業が意図しているものと学生さんの間でギャップがあるかないか、というのが大事なのではないかと思います。我々の方の意識改革、学生さんの意識改革、両方必要なのではないかと思います。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

これだけ広範囲に学生さんをたくさん受け入れられているというのを初めて知りました。私も3大学で講義させていただいておりますけども、私は労働組合の立場から、働く前のワークルールとか、どういう意識を持って企業を選択するのかといった実践的な観点からお話をしています。その講座は自ら手を挙げて、学ぶ意欲を持って受講してくれているので、受講生の意識も高いです。

就職については、現在、就職活動は非常に入りやすい実態があります。そこで、大学に入学した時から4年後、どういったことを目指すのかで就活もしなさいと言っています。「どんな自分になりたいのか?」「どんな仕事に就きたいのか?」を考えるには、インターンシップもしっかり行って、現地で体験をするのが一番だと伝えています。

ある学生に「京都学生祭典に関わっていたら就職は大丈夫だと言われたのですが、それでよいでしょうか?」と尋ねられたので、「それもしながら、就活もしっかりやりなさい。片方だけやって片方は置いておくというのではなくて、しっかりと自分を見つめてやってください。」とお話をしました。

昔と違って、私の小さい頃には、例えば大工の棟梁とか職人さんも身近にいたし、いろんな人が周りにいました。そして親ではない人にも叱られながら「悪いことをしてはいけない」というのを学んでいきました。また、兄弟が多かったりとか、友達同士の間でも自然の学びがありましたが、今はあまり、それがありません。ネット社会になって、子どもが集まっていると思うと、みんなネットをしている。集まってゲームをしたりしている。親でも子どもの頭の中、何を考えているか、はほとんど理解できていないのではないかと思います。まずは「おはよう」「おかえり」など言葉にして伝える。親子でも頭の中はわからないので、言葉にして伝えてわかりあうことが大事だと思います。

学生さんのボランティアに限らず、地域活動なども人手不足です。育ててもらった地域に恩返しとして活動するのが当たり前だったけれども、今の社会ではそれが難しくなっているのです。学校教育のどこかのタイミングで、ボランティアや地域活動を推奨することができないかと思います。

学校現場でも働き方改革が言われています。そこで薄く広くではなくて、例えば指定校に人を配置してしっかりやってみてどうなるかを検証してみるのも、一つの方法ではないかと思います。教育は本当に大事でおろそかにすると、10年後20年後の日本が大変なことになってしまいます。

それと繰り返してしまっていますが、ネット社会です。それ自体は悪いことではありませんが、しっかりフェイストゥフェイスで言葉にして伝えることが大切です。ネットを活用するなら、動画で思いを伝える。文字ではなく言葉で伝えることをすれば変わっていくのではないのでしょうか。



就職に関しては、親から言われることが多いですが、私がいつも言っているのは、「あなたがしたい仕事を見つけなさい。」ということと、「入れる会社ではなくて、入りたい会社を選びなさい。」ということです。自分の体験談も含めて学生にはいろいろと伝えていきたいと思っています。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）



今のお話を聞いていて、若い人への厳しい御意見が非常に多かったものですから、30年前の自分が叱られているのかなと思ってしまいました。私自身、人に積極的に関わるタイプではありませんでした。学生ってやはり、知らないんですね。ものを。ですから学生の視点でまちの様子を見るというのは、大人の視点から見て足りないのは当然だと思います。

私は地方から出てきて、京都で学生生活を送って、京都の新聞社に入りましたけれども、30代の頃に6年程、東京に勤務しておりました。人間って職業を通してその地域を見るということがあると思います。私は東京に行って、東京に集まってくる情報に触れて、東京が日本を動かしているんだということを実感しました。例えば私が学生時代を東京で過ごしていたら、そういったことに気付くことができずに、東京の賑やかで華やかな世界を感じただけで終わってしまったのではないかと思います。

私は京都で学生生活を送りました。振り返ってみると、京都の古いもの、伝統的なものの上っ面だけを見て過ごしてしまったのではないかと思います。今、京都にいろんな企業の方が赴任してきています。単身赴任の方もいらっしゃいます。ある一定以上の年齢の方は、暇さえあれば寺巡りをしたり、まち歩きをしたりしています。おそらく、社会人としての目線で、この京都というまちを見ているのではないのでしょうか。今日のテーマは「学生のまち京都・大学のまち京都」ですが、学生だけがこの「大学のまち京都」を作っているのではなくて、社会人（大人）がこの京都に来て、どういう目線で暮らしているのか、ということが大事なのではないかと思います。

大人が京都の伝統行事とか日常的な近所付き合いにどういう関わりをしているのかを学生にしっかりと見せる。大人がそういうことをできているかどうかですね。大人の振る舞いをみて、かつての私のようなシャイな学生は、何も言いませんけどしっかり見ているのではないかと思います。

若い人に厳しいことを言うのも結構だと思います。それが何年か経って、京都でこういう風に叱られたな、とかこんな指摘を受けたな、ということが後で響いてくる。それが、この「大学があるまち」の教育的な側面ではないかと、50を過ぎた私は実感しているところでございます。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

京都には宝がいっぱいあると思っています。古い歴史や文化もちろんのことですが、人口の1割を占める学生が京都で育っているということ。京都で育つことの意味を大事にしながら、京都市の施策に「日本の若い人たちを育てるまち京都」という意味合いで京都だけのことでなく、日本のこれからを担う若い人たちを京都というまちが育てるんだ、

という感覚を持っていろいろな施策を進めていく。そこに市民も積極的に関わっていく。学生と関わることで私たち市民にもいろいろなものが見えてくるきっかけにもなっていく。京都の新しい面が見えてくるところもあると思います。

○ 塩野谷 和寛 大学政策部長（京都市総合企画局 総合政策室）

ありがとうございます。京都学生祭典は17回を今年で数えますが、こうして御意見を伺いますと、京都学生祭典には、いろいろな方が関わってくださって、いろいろな思いを持ってくださっていると感じます。20回に向けていろいろ改善していきたい部分もありまして、すぐには難しいかもしれませんが、しっかりやっていきたいと思えます。

それから学生向けアプリについても御指摘をいただきました。単に情報発信するだけでは、差別化されずに埋もれてしまうものですし、しっかりと学生さんに日常的に使ってもらえる、そしていろいろな取組に引き込んでいくというのが役割ですので、行政がただ単に発信するのではなくて、地域の方もそうですし、学生さん自身もそうですし、双方向のプラットフォームにしたいという思いを持っておりまして、着実に進めていきたいと考えています。

「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画 2019-2023」にも次の社会を担う人材を育てていくことを掲げています。地域の方々と一緒にこれからの若者を育てていきたいと思っております。

○ 前田 智弘 室長（京都市総合教育センター 教員養成支援室）

協議をお聞きしていて、若い学生さんに対する温かくそして強い期待を感じました。実地研修の参加人数の減少についても御指摘を受けましたが、皆様の御期待を受け、参加人数のV字回復を目指していきたいと思えます。

当日、御欠席だった本郷副議長からも御意見をいただきました。



○ 本郷 真紹 副議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

- 大学と地域の連携は、何を目的としているのか、ねらいを明確化するべきである。
- 地域連携の仕組みは様々なタイプがある。「授業の一環で単位を認定していくもの」「純粹に学ぼうとするもの」など。どちらかというところ、不特定多数を対象とした授業、単位認定といったものは、継続性がないので、なかなか難しいかもしれない。「先輩から直接、聞いたり」、「ゼミや部活ごとに地域のお祭りなどを手伝う」といったことであれば、継続しやすい。
- 北区の地域力推進室とは、連携しながら「学区まちづくりビジョン」を作成している。大学生も「自分たちが住んでいるまち」という意識を持つことが大事。
- 課題を共有できると動きやすい。大学には体育会系、留学生、教職を目指している学生など、いろいろな学生がいる。もし地域から、大学（生）と何かの事業に取り組みたい場合、立命館大学なら「地域連携課」に話を入れてもらえれば、こういった学生や集団（ゼミ、サークル、部活等）に提案するか検討できる。

- ・高齢者が増える中、地域を支える人も高齢化している。高齢者との関わりは学生にとっても必要であり、大学生の力をうまく活用していければ、支援をしていく人の高齢化にも対応できると考える。
- ・大学生も地域の人から、お祭りの手伝いなどについて声をかけられるとうれしいと思うし、違う視点の人と接していかないといけない。例えば地域清掃などは、学生にとってもいい経験である。また「中3学習会」のような子どもの支援にも大学生が参画していけたらよい。
- ・教職を目指す学生は年々教職単位が多くなっており、余裕がないが、学内だけだと世界が狭いので、外との交流は必要である。
- ・潜在的なニーズはもっとある。魅力ある打ち出しをしていければ、大学の枠を超えた取組ができるのではないかな。

■ 報告一1 第61回全国社会教育研究大会兵庫大会について

- 配布資料 [第61回全国社会教育研究大会兵庫大会について](#)
- 事務局から
 - ・10月24、25日に神戸市において大会が行われ、田村毬絵委員と事務局職員が参加した。1日目は主に講演会、シンポジウム。2日目は分科会が行われた。
 - ・この会議は年に1回、全国の社会教育委員や教育関係者が集い、意見を交換する場で、全国から1,000名以上の参加があった。
- 田村 毬絵 委員（市民公募委員）
 - ・私が参加して特に印象に残ったのは、劇作家の平田オリザさんによる「わかりあえないことから一多文化共生を目指す演劇教育」と題された記念講演です。
 - ・人間らしさというのが、どのように演出されているかや、コンテキストのずれや近すぎる文化から生まれる誤解といったことを説明されていました。
 - ・また、誰もがどこまでも情報にアクセスできる社会では、一方では情報・文化・経済格差が地域間格差の拡大につながると危惧されます。そこで社会教育と学校教育の連携を通して、人々を孤立させない社会のセーフティネットの視点が必要である、という話をしてられました。
 - ・仕事に疲れた人であったり、休職している人に対して単に就労支援をするだけではなくて、1日何かその人が好きなことや趣味、映画を見るであったり、京都だったら神社仏閣を回ったり、おいしい御飯を食べたり、きれいな着物を着たり、といったその地域で生きる楽しさを含めた社会のセーフティネットの構築が大切なのかと思いました。

■ 報告一2 京（みやこ）まなびいニュースレターについて

- 配布資料 [京（みやこ）まなびいニュースレターについて](#)
- ・9月発行の第23号は吉川議長に「コミュニケーションを本気で学ぶ」と題して執筆いただいた。
- ・また、京都アスニー発行の「まなびすと」に森委員による「新たな知への問い」と題したコラムが掲載されている。

- 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）
 - ・今日もコミュニケーションの難しさが話題に挙がりましたが、私が今、「ユマニチュード」というケアの技法について学びながら感じている、「人と人が言葉を交わすというのは簡単にやっているように見えるけれども、じっくり考えてみると非常に難しいことをやっているんだな。」ということを書かせていただきました。
- 森 清頭 委員（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）
 - ・今日の議事にもありました「京都世界遺産PBL科目」について書かせていただきました。
 - ・「京都世界遺産PBL科目」は課題解決型の授業です。「1+1=2」というような紋切型のものや、小手先のようなものではなく、各学生が育ってきたバックグラウンドも多様なものがありますので、「あなたしかできない問いかけは何なんですか？」というのを、この授業では絶えず発信するようなところがあります。
 - ・それが志というか、自分の問いというものに気付いていってもらえたらうれしいなと思っています。
 - ・OB・OGは60人ぐらいになってきて、毎年1回、みんなで集まってお鍋を食べる会をしたりして、その中から結婚するような者も出てきました。一つのコミュニティが出来て、京都で学んだ同志がそれぞれの部分で活躍してってくれています。
- 事務局から
 - ・「まなびすと」左側のページでは、森委員に案内いただき、清水寺取材させていただきました。清水寺近くの「京都市文化財建造物保存技術センター」において、若い職人さんが檜皮葺きの研修を受けておられる様子も紹介している。
 - ・また、1～3月には「京の冬の旅」で文化財の特別公開があり、片山委員と榎木委員が登場されているので紹介している。
 - ・次回は、令和2年3月に発行される「まなびすと」に掲載予定で、佐竹委員に執筆を依頼している。

■ 報告—3 京（みやこ）まなびミーティングについて

- 配布資料 [京（みやこ）まなびミーティングについて](#)
- 事務局から
 - ・社会教育委員に講演等いただく「京まなびミーティング」では、11月1日の「古典の日」に京都アスニーが開催している「古典の祭典」において、片山委員に御講演いただいた。
 - ・能の魅力、素晴らしさ、後世により良い形で伝えていくことなど、実演を交え、分かりやすくお話をいただいた。また、客席におられた方に、能装束の着付けをしていただくなど、本格的な能の舞台とは違った、親しみやすい講演内容であった。

■ 報告—4 京都市生涯学習市民フォーラムについて

- 配布資料 [京都市生涯学習市民フォーラムについて](#)
- 事務局から

- ・市民ぐるみで生涯学習のまちづくりを進めるため、市内252の生涯学習団体からなるネットワークとして、「京都市生涯学習市民フォーラム」を組織しており、年に一回、総会に合わせて、市民の参加を得てシンポジウムを開催している。
- ・今年度は、11月5日、京都大学百周年時計台記念館において開催し、当日は満席に近い多くの皆さまに御来場いただいた。
- ・今回から、吉川議長・本郷副議長がフォーラムの副会長に就任された。
- ・総会では、永年、本市生涯学習の推進に御貢献いただいた85名の方に松本絃会長と門川市長から表彰状を授与いただき、また、新たに7団体に加盟いただいた。
- ・明治2年に京都の町衆が自分たちの手で「番組小学校」と呼ばれる学校を創設して150周年ということで、今年度は番組小学校記念シンポジウムとした。
- ・番組小学校を紹介するとともに、これから必要となる「学び」を考えた時、「多様性（ダイバーシティ）」がキーワードではないかということで、榎木委員と京都精華大学のウズビ・サコ学長をパネリストにお招きした。
- ・サコ学長は、アフリカのマリ共和国の御出身で「多様性というのはお互いの違いを認め、お互いに成長していくこと」や「フレーム・型を破っていくということがこれからの日本社会を多様化していく一つの方法である」ことなどをお話いただいた。
- ・榎木委員には、日頃、学生に着物や伝統文化を教えておられる中で、感じておられることなど語っていただいた。
- ・参加者のアンケートでは、「京都にいながら知らないことがいっぱいあり、勉強になった。」「ダイバーシティについて、強く意識づけられた。」などの感想をいただいている。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

- ・貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。今回は対話型で言葉のキャッチボールの多い内容だったので、登壇するものとしては緊張感いっぱいのフォーラムでした。サコ先生のお話など大変、興味深く、客席で聞きたかったなと感じました。

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

○ 事務局から

- ・インタビューなどを交え、京都のまちを様々な視点から紹介している冊子「京都シティグラフィ」について、鈴鹿委員に御協力いただいた。「京の文化で未来の扉をひらく」というテーマで「京都のまち」、「日常に生きている和の文化」や「環境と共に未来に伝えていくこと」等についてお話いただいた。
- ・「京凶ものがたり」は京都市図書館の冊子であるが、第50号を記念し、中西 進 京都市中央図書館・右京中央図書館館長に寄稿いただいている。「ことばの音楽を取り戻すこと」、「肚（はら）でことばを受け止めること」を文字と魂などの観点で、令和の時代、AIの時代における読書について御提言いただいている。
- ・「京都はぐくみ通信 GoGo 土曜塾」では中学生がジュニア観光大使として、京都の魅力を取材し、伝えてくれている。今回（11・12月号）の14、15ページでは、びわ湖疏水船の新しい船と、50周年を迎えた青少年科学センターを紹介。

■ 閉会（吉川議長）

■ 閉会挨拶（在田教育長）